

## 第2課 指導者の危機

【暗唱聖句】 「ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた」イザヤ 6:1

### 【日曜日・ウジヤ王の死】

ウジヤ王の本当の名前はアザルヤ。ウジヤという名前は「主は力」という意味があり、アザルヤには「主は助ける」という意味があるが、名前が変わって行く背景に預言者ゼカリヤの存在があった。

「神を畏れ敬うことを諭したゼカルヤが活着している間は、彼も主を求めようように努めた。彼が主を求めている間、神は彼を繁栄させられた」(Ⅱ歴代誌 26:5)

「ところが、彼は勢力を増すとともに思い上がって墮落し、自分の神、主に背いた。彼は主の神殿に入り、香の祭壇の上で香をたこうとした」(Ⅱ歴代誌 26:16)

「香をたく」とは、いけにえを焼いて煙にすること。それは祭司にだけが行える行為だったが、高ぶったウジヤは自分で香をたこうという越権行為に及ぼうとした。それは神に背く行為であり、神を軽く見る行為でもあった。それに対してイザヤは自分の汚れや弱さを自覚し、神の清めが近づくのを待ちました。ウジヤは祭司アザルヤらに責められ手に香炉を持ったまま怒りをあらわにすると、たちまち重い皮膚病が発症した。これは「主の神殿に近づくことを禁じられた」(Ⅱ歴代誌 26:21) ことを意味した。ウジヤは隔離され、王の職責を果たすこともできず、その子ヨタムが代わるようになって死んだ。ウジヤの軽率な行為は、高慢な心が招いた。高慢な心は神の教えを軽く考えるようにさせ、自分を神の上に置くことに他ならなかった。

### 【月曜日・聖なる、聖なる、聖なる】

ウジヤ王はアッシリアが攻め上ってくるという混乱の只中で死んだ。このような不安定な国内状況の中でイザヤに主の幻が臨んだ。

「ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた」イザヤ 6:1

イザヤは国内状況の混乱とは別世界の神の国に入れられる。そこには神の御座があり主が座しておられるのを見る。原語では「私の主」を見たとなっている。同じことがダニエルやエゼキエル、ヨハネも経験している。これは平安を失ってしまうような状況の中だからこそ、私たちは神の国を求めなければならないことを教えている。衣の裾は神殿いっばいに広がっているのは、神が全天・全地を支配していることを現わしている。

「上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた」イザヤ 6:2

セラフィムは天使のこと。複数形(単数系はセラム)。語源は「燃える」という意味の「サーラフ」。セラフィムを天使を現わす意味として用いられているのはイザヤだけで、後は蛇として訳される。ルシファーも元はセラフィムの一人だったと考えられており、蛇となって人間を誘惑したのは興味深い。セラフィムと似ている天使にケラビム(単数形はケルブ)がいる。二つの翼で顔と足を覆うのは、神への尊敬と恐れ、そして謙遜な態度を現わしている。

「彼らは互いに呼び交わし、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。」イザヤや 6:3、4

セラフィムは、「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主」と主なる神を賛美している。ヨハネは黙示録4章に出てくる4つの生き物(天使)も同様に、6つの翼があり、昼も夜も絶え間なく「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな…」と主を讃美している。イザヤは天の光景を見、その純潔さと神性さに圧倒された。そして、人間の罪の世界との違いを思い知らされた。

### 【火曜日・新しい人格】

「わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」イザヤ 6:5

イザヤは天の聖なる光景を見せられて、滅ぼされると感じた。それはあまりにも自分は汚れおり、また汚れた世界に生きているにも関わらず神を仰ぎ見たからだった。そして預言者として使命を果たすためには、この不完全なままの状態では無理だと感じた。私たちもし神を見たならば、同じように感じることだろう。ところで、単に汚れているではなく、「唇が汚れている」と表現したのは、心の中にあることが言葉となって出てくるので、心の中、思いが汚れていることを現わしている。

「するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたのであなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」イザヤ 6:6、7

セラフィムが祭壇から取り出した燃えさかる炭をイザヤの唇にあてると、たちまちイザヤの咎が取り去られ、罪が赦された。「燃えさかる炭」とは祭壇にささげられたいけにえが焼かれてできる「炭火」のことで、それは後に身代わりとなるキリストを象徴している。この一瞬にして咎が取り去られ罪が赦される経験が、わたしたちの上にも主にあってなるのです。

#### 【水曜日・神による任命】

そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」イザヤ 6:8

不義のきよめと罪の赦しの恵みを経験したイザヤは、天上から「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか」と語りかける声を聞く。イザヤの召命は強制的なものではなく、あくまでも任意だった。イザヤはこの時点ですでに預言者として召されていたと考えられるが、ここで改めて神はイザヤを特別な使命のために召されるのである。天の驚くべき光景を見せられ、清めをうけたイザヤは大いに励まされたことだろう。「誰が我々に代わって行くだろうか（「私」ではなく「我々）」と言われたとき、すぐに「私を遣わしてください」と答えるのであった。

#### 【木曜日・驚くべき勧告】

「主は言われた。「行け、この民に言うがよい。よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなくその心で理解することなく悔い改めていやされることのないために。」イザヤ 6:9、10

主の召しは驚くべきものだった。イザヤの語るべきメッセージが「民の心をかたくなにする」内容のものだったのだ。それは何ら生産性のない働きであり、多くの人々を神の救いに導くための働きではなく、むしろ神の救いから遠ざける働きとなるのであった。神のメッセージを語れば語るほど、人々の心は頑なになり、神から離れて行くという務めなのであった。福音を述べ伝えるとき、実際に同じような経験を何度もさせられる。それでも諦めないで神の言葉を語り続けるのである。勝手に耳障りの良い内容に変えてはならないのである。しかし、なぜ神は民の心を頑なにされたのか。イエス様が経験されたことと同じである。イエス様が多くのしるしを行い、み言葉を語っても人々は信じない。目が見えなくなり、心がかたくなになっているので悟ることができず、立ち帰ることができない。その結果、十字架へとつながるのである。イザヤはまさに主と同じ道を歩まされるのだった。このことをヨハネは語っている。

「神は彼らの目を見えなくし、その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない。」イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである」ヨハネ 12:40、41

ただそのような民の不信仰にもかかわらず、神が預言者を立てて下さったことに希望がある。なお、出エジプトでも神がパロの心を頑なにしたとある。これは400年もの奴隷生活のために神への信仰が分からなくなっていた民たちに、神の御業（裁きと守り）を見せるためであろう。